

まちの宝物(9) 朝鮮通信使

◎上関に残る朝鮮通信使ゆかりの史跡

朝鮮通信使一行の人数は3百人から5百人程で、それに先導役の対馬藩、接待役の諸藩の藩士を含めると1千人を越す人が寄港地に滞在したと言われています。

上関では、萩藩が三使(正使・副使・従事官)の宿となる「御茶屋」と呼ばれる広大な迎賓館で、一行を盛大にもてなしました。また、萩藩は数百隻の警護船で一行を迎え、他の船と合わせると二千隻にも及ぶ大船団が上関海峡を埋め尽くしていたようです。超専寺所蔵の「朝鮮通信使船上関来航図」は、朝鮮通信使の船団が上関に入港する様子を描いたものです。

当時を偲ばせる朝鮮通信使ゆかりの史跡をいくつか紹介します。



「朝鮮通信使船上関来航図」(超専寺 所蔵)

6隻の通信使船と萩藩の警護船が描かれています。左上部に高官の宿舍となった「御茶屋」、左中央に「唐人橋」、中央上部に「旧上関番所」が描かれています

《唐人橋(とうじんばし)》跡

朝鮮通信使来航の際、萩藩は日常的に使用する雁木の上に、木材で仮設の棧橋を作りました。それを「唐人橋」といい、朝鮮通信使の上陸専用の橋として使われました。使用後はすぐに萩藩によって取り除かれました。

朝鮮通信使は、船を唐人橋に接岸して、船先から歩み板をかけて上陸しました。上陸した唐人橋から、宿泊・休憩場所の御茶屋本館・中官舎・下官舎までは、一行に土を踏ませないように新しい筵(むしろ)が敷かれました。

《御茶屋跡》

萩藩の迎賓館で、藩主をはじめ参勤交代の諸大名、幕府の使者、朝鮮通信使などが宿泊しました。

御茶屋の敷地は、旧熊毛南高校上関分校所在地から海岸まで二千坪にもおよんでいました。

建物は、明治3年に、御座の間・玄関・長屋門など一部を残して解体され、現在はこの正門の石垣、井戸跡、長屋門の石垣のみが当時の御茶屋を偲ばせています。



「上関御茶屋仕講図」(岩国徴古館 所蔵)

※各史跡の場所は先月号を参考にしてください。

御茶屋正門脇の石垣は、今も同じ場所にあります。

当時は間口5メートルの階段がありましたが、現在は小さめの石を積んで埋められています。



今も残る御茶屋正門脇の石垣

《旧上関番所》

旧上関番所は港の警備、見張りの他、越前会所で扱った積荷の検査や運上銀(税金の一種)徴収なども行っていました。

番所は1632年に四代に置かれたが、建物の破損が著しかったため1711年に上関に移されました。建物は第8回朝鮮通信使来日時に建てられた飯番所を萩藩の番所として、赤間関(下関)の番所の規模に準じて改築されました。

当初は海岸沿いになりましたが、平成8年に現在の場所に移されました。平成14年には、番所の敷地内に朝鮮通信使来航記念詩碑が建立されました。詩文には、9回目の通信使が上関に寄港した際、朝鮮側の外交官、申維翰(しんゆはん)が上関での歓待を喜んだ心情が詠み上げられています。



旧上関番所



朝鮮通信使来航記念詩碑

《超専寺(ちようせんじ)》

超専寺は、朝鮮通信使を接待した萩藩の総責任者の本陣でした。江戸時代後期の大火で焼失し、建て替えられました。

現在では1870年に取り壊された藩の迎賓館「御茶屋」の門を移築し、山門としてその姿を伝えています。

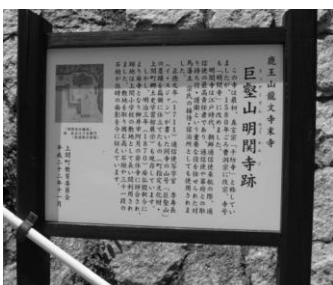


御茶屋の門を移築した超専寺の山門

《明関寺(みょうかんじ)》跡

明関寺は江戸時代、朝鮮通信使来航の際、通信使の最高責任者であり、通信使や幕府との取り持ち役・護衛という重要な役を任せられた対馬藩主 宗氏の接待・宿泊所として使用されました。

明治3年に廃寺となり、跡地は長い間、旧上関小学校の敷地として利用されました。敷地を取り囲む石垣や石段が、当時の面影を残しています。



明関寺跡の看板

《住吉神社》

住吉神社は御茶屋の守護神として、御茶屋の裏手に祀られていました。1767年に航海の守護神として海の近くの現在地に移されました。



住吉神社

◎「わいわいタイムス」9月号は9月7日(日)発行予定です。